

3 なにわの生涯学習

——「町人学者」の伝統と「する」文化——

井 上 宏

(関西大学名誉教授)

はじめに

「生涯学習」という言葉が、気軽に使われるようになったのは、そんなに古い話ではない。日本語ではあるが、今もってその中味についてのイメージには、漠然としたところがある。昭和四〇年（一九六五）に、ユネスコの「成人教育推進国際委員会」において、フランスのポール・ラングランが、「生涯教育」の考え方を発表し、それがきっかけで、「生涯学習」という言葉が広がっていくことになった。「生涯教育」とは、年齢にこだわらず行われるもので、学校教育は一つの段階で、生まれてから死ぬまで、人間は生涯を通じて学び続ける必要があるという考え方が、社会全体に浸透しだした。人間にとっての

教育は、「学校教育」が終わったから終わったのではないのだ、というメッセージが広く行き渡ったように思う。

現在では全国のどの市区町村でも、従来からあった「社会教育部」や「社会教育課」を「生涯学習部・課」という名称に変えたり、「社会教育課」とは別に「生涯学習課」を併置したりして、社会教育関係法令等で示された施設や市民の学習を支援するための生涯学習関連施設を整備しており、そうした場所を利用して、市民の多彩な学習活動が展開されている。まさに多彩に展開されているのだが、では「生涯学習」とは、一体何を学ぶことなのかと言うと、その幅はあまりに広く解釈されていると言ってよい。個人の趣味・教養から公的な課題の勉強、ビジネスの仕方、資格の取得に至るまで多様である。しかし、そのあり様は「学校教育」をモデルにして、個人がどこかの教室に通つてというように、個人が単位になっている。グループを組織して、自主的に運営されているケースも多々あるが、グループ単位で、市民が自主的に学習活動を進める考え方は、近年ようやく広がりつつあるように思われる。大阪でも「新しい学び」として取り組んでいる。

私は、古くから市民の間に存在した趣味や教養の結社、サークル、サロンなどの形態をこれからの「生涯学習」と結び付けて考えてみたいと思う。

「趣味・教養を高めたい」市民の要望

平成一六年（二〇〇四）に大阪市が市民を対象に実施したアンケート調査（『大阪市における生涯学習についての世論調査報告書』大阪市、二〇〇四年）がある。その中に、『生涯学習』という言葉から思いうかべることについてという設問がある（有効回収調査票数一四五八）。

結果は、図1を参照してもらうことにして、一一の選択肢から三つまでを選択しての回答で、高い順位から示すと、一位「趣味・教養を高めること」（四八・〇％）、二位「幼少期から高齢期まで、生涯を通じて学ぶこと」（四六・四％）、三位「生活を楽しむ、心を豊かにする活動すること」（四四・九％）の三項目が他を引き離して断然多い。次いで「高齢者の生きがいをつくること」（三六・四％）となっている。「家庭などの問題を理解したり、解決の方法を学ぶこと」「ボランティア活動をして社会に貢献すること」のイメージは弱い。勿論、年代や職業別では違った傾向が

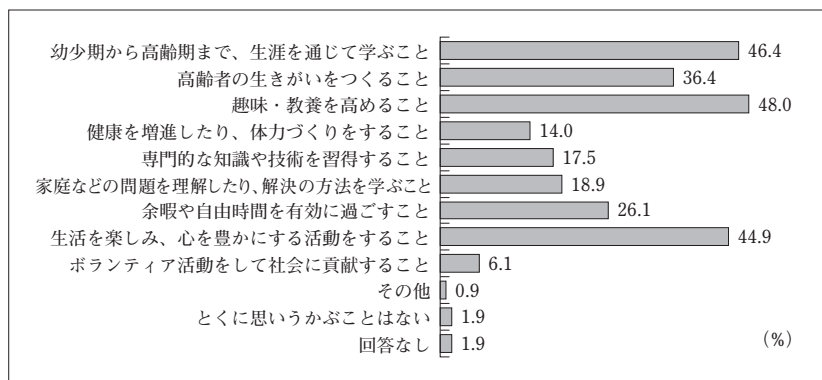


図1 「生涯学習」という言葉から思いうかべることについて

資料）大阪市『大阪市における生涯学習についての世論調査報告書』2004年

見られるが、大筋では一位から三位の期待が「生涯学習」に寄せられていることが分かる。端的に言えば、趣味・教養を高める活動を楽しくやりたい、ということになるうか。こうした「生涯学習」への期待は、ポール・ラングランの提唱を待つまでもなく、日本社会には古くから伝えられてきたと思われる。

江戸時代の大阪では、町人階級の上層から、丁稚小僧に至る層まで、それぞれに学ぶ場所を作り上げた。それだけではなく、趣味・教養の類の「俳句」や「連歌」の会など、同好会や結社の団体を数多く誕生させた。団体の中の社交を大事にして、市民としての礼節も同時に発達させた。仕事や身分や地域の違い人たちの交流の場、時には情報ネットワークの場所ともなった。

町人の学問所——懷徳堂から寺子屋まで

江戸時代の大阪は、日本全体の経済活動の中心地として発展を遂げた都市で、複雑化した金融や物流の世界を運営するには、相応の知識、体験、分析力、判断力を身に付ける必要があったし、丁稚小僧の時から教育を受けなければならなかった。経営に責任のある旦那や番頭衆は、商いの現実に即して、商いの論理と道義を探究し、自らの手で学ばなければならなかった。

享保九年（一七二四）、大阪の町人五人が組んで、自らが出資し、自分たちが学ぶための学校「懷徳堂」を作った。土地は幕府から「拝領地」という扱いを受けるが、運営はすべて自前で、既成概念にとらわれない教育を展開した。ここが輩出した富永仲基、中井竹山、中井履軒、山片蟠桃などは「町

人学者」の代表として語り継がれ、懷徳堂は、西日本での「学芸交流のネットワークの中心」となっていた。「山陽・四国・九州といった西日本を中心とする各地から大坂へ学びに来る動きが顕著となり、西日本全体に大坂を中心とする学芸交流のネットワークが形成され」「懷徳堂はその中で、学芸情報センターのような位置と役割をもつことになった」(山中浩之「町人の学問所」『大阪の歴史力』(社)農山漁村文化協会、二〇〇〇年)。

木村兼葭堂(一七三六—一八〇二)のことについても触れておかなければなるまい。大阪の北堀江で、造酒屋を営む町人で博学多芸の人として有名である。本草家であり、文人であり、画家であり、収集家・蔵書家であり、茶人であり、と言われ、多くの人が彼の元を訪ねた。当時の文化サロンの主宰者でもあった。幼少の頃から体が弱かったので、父母のお陰で学問をさせてもらったという。父の財産を受け継ぐが、お金がたつぷりとあったというわけではない。彼は漢詩文にも関心を持ち、宝暦八年(一七五八)頃から、兼葭堂会という作詩の集まりを開いた。後にこの会の後を受けて片山北海を盟主とする詩文結社の「混沌社」が、明和二年(一七六五)に生まれる。「その顔ぶれは、商人や医師・武士など二〇—三〇代の若い世代を中心としたさまざまな職業・身分の人々」であった(有坂道子「町人学者たちと混沌社」『大阪の歴史力』)。

子供たちの世界においては、街のあちこちで「寺子屋」が繁盛したという。『摂陽奇観』宝暦二年(一七五二)の条によれば「大阪中寺子屋二千五百軒あまり、およそ七万五千人あった」という。山中浩之

氏は、当時の大坂の人口（約四〇万人）から見て、「その二〇パーセント近い寺子数というのは、やや誇張された数字でしょうが、一八世紀半ばには大坂市中には、これほど多くの寺子屋があるという印象を人々がもっていた」という（『夜学もあつた商人の町大坂の寺子屋』『大阪の歴史力』）。

経済的な活況の中で築かれていった町人社会には、自らが「する」ということ、まずは実践してみるという心が育っていったと思う。ここで、私は大阪の「する文化」を指摘したいと思うのである。何かを「する」に当たっては、「学ぶ」ことが必要である。商売のことであれ、社交のことであれ、趣味の追究であれ、まずは「学ぶ」ことで、実践しながら「学ぶ」ことが要請される。

学問で言えば、「学びたい」という心である。当時の貨幣経済が浸透した社会の動きの中で、必要とする知識、商いに精を出す倫理の追究は欠かせない「時代の要請」であつたであろうから、現実の動きを自らの目で確かめ判断していく姿勢が求められた。自らが「学ぶ」ことで状況を突破しようとしたのだと思われる。

「学ぶ」ことがまた「楽しい」ということも、学んで初めて分かるわけで、そうした「学ぶ楽しさ」が、町人の世界の伝統として生きていると思うのである。

生きている「町人学者」の伝統

大学のアカデミックな歴史研究や考古学研究とは違った方法で研究成果を上げる人たちがいる。好き

だからこそ「する」という町の中の人々である。

渡辺武氏の『大阪城話』（東方出版、二〇〇三年）に「大阪城愛好家」の話が紹介されている。お城が好きなのというのは意外と多くいて、中には好きが昂じて城郭の調査研究に乗り出す人が少なくない。長年そろばん塾経営をしてきた東大阪市在住の藤井重雄さんはその一人。「一九六三年から、独力で大阪城石垣刻印調査に取り組み始め、今日に至るまで延々実に四〇年間、壮大な作業を続けておられる」。「協力者もふえてゆき、一九六八年、自ら事務局長を務める日本古城友の会の専門部会として築城史研究会を設立、その代表となり、長期的なグループ活動として、全面的でより徹底した大阪城石垣刻印の悉皆再調査を精力的に展開されるようになった」とのことである。

今一人は枚方市在住の写真家で石田多加幸さんである。「石田三成同族会と友の会」の設立者で「会の活動の推進者であるが、同時に、豊臣秀吉と石田三成の事績をカメラで追いかけて続け、多くの写真集や歴史出版物を残してこられた実績のある歴史写真家である」。『石田三成写真集』や『写真で見る豊臣秀吉の生涯』（新人物往来社）などの著名な写真集を出しながら、石田さんは一方で「街の写真屋さん」である。「奥さんと息子さんの協力を得ながら、結婚式や卒業式、七五三のお祝いなどの記念写真を引き受け、市民写真のD・P・Eの窓口も引き受ける」写真屋さんである。

自分の仕事を別に持ちながら、自分の好きなことを、好きだからこそ徹底的に追求して成果を上げ、グループを作って仲間を作る。こういう人は、大阪に限らずいるものである。比較する史料はないけれ

ども、伝統的に大阪には多いように思われる。

仕事には、それぞれ専門家がいてこそ、高度で専門的な仕事が成り立つのは言うまでもないが、人間には、それぞれの生き方があって、生涯をどのように生きるか、仕事一筋の生き方もあれば、趣味も生かして人生をエンジョイする生き方もある。人生をトータルに考えれば、人生の旬に合わせたの生き方があってよいわけだ。

大阪の「する文化」と「新しい学び」

何事も好きなことは、見て聴いて楽しむというところから始まるが、自分でやってみると、楽しみが一段と増す。やったから上手になるとは限らないが、上手になって人からも褒められれば楽しみも増大する。大阪では、上達せず人から笑われても、自らやった方が楽しいという人が多い。私はそれを大阪の「する文化」と呼んでいる。

自らはやらずに人がやるのを見て批評する方が楽しいと言う人は、敢えて恥をかくようなことは避けるであろうが、大阪の人はどちらかと言うと「する」方がまし、「した」方が楽しいと思っている人が多い。恥をかいでも自分を笑ってしまえばしまいである。損をしても、自分が損するだけで、それも笑ってしまえばしまいである。自分は自分だという気持ちが強いの。これで儲けてとか、名声を博するとか、権威を付けるとか、そんなことには関係なく、自分の楽しさを追求しようとする。それも商いをしながら

らである。絵も描き、踊りもできて、書にも秀で、俳句や歌を詠み、お茶やお花にも通じてという遊び人が生まれる。小さな木村蒹葭堂が、あちこちにいるように思われる。

これまでの生涯学習というのは、公的な生涯学習施設が用意してくれた学校・教室・クラブに個人が通って、趣味・教養を身に付け、教室で付き合った仲間との交流を図る、という程度でなされてきた。勿論、そうした形も引き継がれていくであろうが、ここで考えたいのは、他人に頼るのではなく、自らが学びたいテーマや課題を提案して、講師も自分で選び、自らがグループを組織化して、自立して学んでいく仕組みである。

「町人学者」が、あちこちに誕生し、お互いに「教え・教えられ」の関係を市民の間に作っていくことができればと思う。それには、ネットワークの考え方が大事である。今やインターネットの時代なので、ネットワークを使つての共同作業、多様なコラボレーションを市民の間で実現していければ、学んで楽しい社会を作っていくのではないか。市民のマナー、社交の礼節、協調の仕方など、成熟した「市民性」が育っていくことが大事である。

大阪市立総合生涯学習センターでは、市民グループを単位に募集を行い、センター施設を利用しながら、自立して活動できるグループ育成を図っている。センターをラボラトリーとして利用する意味で「ネットワーク・ラボ・グループ」と呼んでいる。原則三年間で、「企画を立案し提案していく能力」「事業を実施できる能力」「他のグループとコラボレートできる能力」「成果を他の市民に伝えることのできる

能力」「生涯学習センターと事業の共催ができる能力」などを身に付けてもらうのが狙いである。

「町人学者」を輩出した伝統と「する文化」の気風は、こうした市民グループを巷に生み出していくことにつながっていかないか。

私は、大阪市の社会教育委員を長年つとめてきて、市民の生涯学習のあり方について、さまざまなケースに立ち合ってきた。これまでの生涯学習の主流は、市の社会教育施設において、各種の講座を提供し、講師を育成し、相談に応じ、あるいは団体に場所を提供するという形で行われてきたように思われる。複数で「学ぶ」となると、自ずからメンバーの「交流」が生じる。

実はこの「交流」が大事で、公的、私的を問わず、地域で「寺子屋風」のサロンがさまざまにできて、市民ネットワークを使って、「教え・教えられ」の関係が、サロンで充実させていくことはできないか。こうした市民間の学びは、講師を招いての講座形式ではない「学び」として、私は「新しい学び」と考えて行きたい。何故なら市民が自発的に自らのテーマを考え、市民グループのネットワークから講師を見つけ、自らの手でサロン運営をするという考え方である。

既に大阪市総合生涯学習センターでは、先に触れた「ネットワーク・ラボ・グループ」が自らのテーマを展開する「ネットワークサロン」を実施中であるし、本書に登場する寺西章江主宰の「にぎわい堂」もそのうちのひとつと考えられる。